

PHD LETTER

〈22〉

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1987・3

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行:財団法人PHD協会
編集人:草地賢一
住所:(3月末まで)〒650 神戸市中央区元町通5-2-3
甲南サンシティ元町ビル7F TEL.(078)351-4892
4月1日より住所を下記のとおり変更いたします。
神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202
TEL.(078)351-4892
郵便振替:神戸1-29688財団法人ビー・エイチ・ディー協会
定 価:100円
レイアウト:エフ アンド エフ

- 対談「PHD運動の役割りとは」..... P.2
- タイ、ネパールスタディツアーレポート..... P.4~5



タイ北部に住むカレンの村で(撮影:宮本達 PHD会員・写真家 箕面市)

これは私たちカレンの人たちがニトオツ・タオサコと呼ぶ、お正月のあつまりです。
誰でも来ることができて、話をしながらごはんを食べます。
みんなとても楽しみにしています。
いつもあまり食べることがない肉の料理もでるし、
なんといっても大勢が集まって食べることが一番のごちそうです。

ကဲလ်ဘိ ရှ: ထိန်ဒါ

ベリア・スティダ (第4期研修生)

対 PHD運動の役割とは 談

PHD協会理事長 今井 鎮雄
PHD運動提唱者・理事 岩村 昇

昨年5月、国際協力事業団の要請にもついでタイに赴任したPHD運動提唱者岩村昇博士が公務で2月上旬来日し、公務の合間に今井鎮雄理事長を訪ねました。タイでの仕事について、PHD運動の方向性についてなど話がはずみましたが、その一部をお伝えしたいと思います。

今井理事長：お帰りなさい。タイでの暮らしはいかがですか

岩村理事：はい、もうとても楽しくやっています。タイの街角にはたくさんのお屋敷が建てられていますが、そこで8パーツ、日本円に直しますと48円のソパを食べて、ハリキってやっています。

今井：ホウ、そのソパを食べたあとですが、お仕事の方はどうということになりますか

岩村：はい、バンコク郊外のサラヤというところのマヒドン大学を中心にプライマリ・ヘルス・ケアの分野で、まあいうならばタイの赤ヒゲ医者の方々をお相手に彼らにつ

づく人材を育てようという計画のお手伝いをさせていただいています。
今井：やはり、人づくりという点でですね。岩村：はい、村に健康をつくりだす人を育てなければという考えなんです。PHDの場合は草の根で10%伸ばせることが楽しくてかなわんという二宮金次郎のような人を二宮尊徳になるようにちょっとお手伝いするわけですが、その尊徳をうまく使う殿様クラスとおつきあいでいるということかもしれませんね。
今井：そのお仕事を通して感じたことがありますか。
岩村：それは今度の東京の会議でも言っているんですが、アジアの国々は後進国じゃないんですよ。地球がより豊かに生きるのびられるかという文化は彼らの方がよっぽど豊かですから……。PHDの動きにしても援助でも協力でいいんです、交流なんです。
今井：そうですね。
岩村：これはPHDにかかわった方がみな経験しておられることでしょう。
今井：シェアリング・パートナー①なんです。岩村：具体的な申しますと、はじめの研修生をむかえて下さった農文塾②の皆さんですが、なぜ反応して下さったかといえば、そこに備えられたもの、たとえば人や動きですがそれをPHD研修生にむけてくれたんですね。ですからネパール、フィリピンの青年と農文塾の皆さんの交流となったわけです。我々たちはちょっとそれをおつなぎしたと……。

今井：最近淡路の五色町の斎藤町長とちよくちよく会うんですけど、ニコニコされてとても嬉しそうにインドネシアからの研修生③のことを話してくれます。あの五色町というコミュニティが世界につながっているということに対する喜びなんです。
岩村：ですから、これは私の自戒ですけど、アジアのニーズを自分が解決しようと思うからダメなんです。PHD協会が解決するのではなくて、PHD運動を使っていたら、アジアの村とPHD協会の関係だけではバイラテラル④じゃなくて、そこに国内にある例えば有機農業における生産者と消費者の関係に結びつけてマルチな関係のつなぎ役、ワンクッションとしていただく……。
今井：そのとおりじゃないですか、例えば私たちがすべてできるなんて思ったらそんな傲慢はないわけで、PHDを通じて触れあい、お互いに交流する中で影響あつていくわけですよ。私達が見もしらぬ人たちの集りにて、話をしたらPHDにかかわっているんだとか、いい動きのことをきいてそれはどこで仕入れたのかと尋ねたら、実はそれがウナだったなんていうことがあれば楽しいだろうと思いますね。そんなふうな運動になるようスタッフの諸君にも、かかわって下さる全国の皆さんにも、このPHDをうたえていってほしいですね。

この後も話は続きましたが紙面の都合で割愛させていただきます。ご容赦願います。

- ① Primary Health Care 一草の根健康づくり
- ② Sharing Partner 一かち合う仲間
- ③ たんば農文塾、兵庫県多紀郡の土からの発案をテーマとする生き方を考える集り、PHD運動のスタート時からご支援をいただく。
- ④ 第4期生、ユリ・タムリン君、86年5月より五色町の柳さん宅で漁業を研修中、事前に町長をはじめ五色町の漁業関係者がインドネシアを訪れた上で、ユリ君を五色町に迎えた。
- ⑤ bi-lateral 二国間の



総主事メモ 浜本さんの涙

水俣病に苦しむ浜本二徳さんは3時間余に及ぶアジア草の根のPHD研修生に自分の闘いの歴史と現在の課題を語り終った。4人の青年の目はキラキラ輝いて浜本さんのメッセージを確実に受け留めていることを物語っていた。「海を汚してはならぬ。自然を壊してはならぬ。いかに君達の村にこの水俣を再現してはだめだよ」

突然浜本さんは涙声になった。「日本語も充分からぬ遠いアジアの国から来たこの青年達は俺のことを確実にわかってくれた。それに比べて日本の人は何ということか、未だに水俣病は金になる位にしか思うとらん。俺が闘ったのは人間としての尊厳や権利を取り戻すためであつて金はその結果じゃない。俺が日本人であるのか呪かしい」。最後は号泣であつた。別項でもご紹介する第2回西日本研修旅行は20日間に及び、ミナマタ、ナガサキ、チクホウ、カネミ、ヒロシマに学び、かつ50回に近い出会いと交流の場が与えられた。ほとんども毎晩枕が変る強行軍に研修生は笑顔を絶やさずよく耐えた。

この旅で色々なグループに出会った。「アジアを考える」、「アジアに学ぶ」、「アジアと結ぶ」。今、西日本の各地には確実にAsiaがアジアとして生活化しつつあるという実感を得た。1年の実り多い出会いと交わりを終えて帰国直前の草の根の青年の感想はこうだつた。
①：PHDは草の根の人々の運動である。
②：日本の人は宗教心に乏しい。自己中心の思い、行動をふりかえることを考えてほしい。
③：PHDの研修目標は、村をつくるためのリーダーシップが第一であつて、農・漁業、保健等の技術はそれを具体化するための大切な手段なのだ。

海外出張報告(2) 今後の研修活動の展開について



左端、崔先生と呉さんご夫妻

先回く1で具体的に触れ得なかった「今後の研修活動の展開に関する調査」についてもう少し詳しく報告させていただきます。PHDレター19号の総主事メモで申し上げた「バイラテラルからマルチラテラルな交流へ」がこの調査の基本線にあります。かいつまんで繰り返せば次のようになっていようか。
われわれの協力、交流は今迄いつも、われわれ(日本)と対象地(国)の二点間に留まっていた。従ってわれわれ(日本)がいつも中心にあり自分を見つめ返すことが困難になっていることに気づきにくい。だからわれわれ(日本)を一段高く見るのではなく対等、平等な関係を維持するためにも日本と他の国(地域)が相補って多角的な協力、交流関係をつくることを目指す。
その相手としてフィリピンの草の根で「村づくり」を進めているさまざまなグループや個

人を選び日本から帰国する前にそこに留まって交わる。多分日本の村とは異なる或いはタイやスリランカにより近い村落社会の中で村をつくることの実践に触れ帰国後の彼らの村づくりへのヒントが得られるだろう。しかもそれ以降せめて手紙による情報交換が続いていけば何年何十年後にその村同志の交流も生まれるかも知れないと思うのです。幸い第3期研修生として迎えたフランク・ファーマンさんがそれを引き受けてくれることになりました。彼のフィールドを中心に、そしてその母体である国際農村復興協会からも



左から、レネさん、私、ウリーさん

協力するとの約束が得られました。しかも同期の研修生のフォローアップとしてウィリー君(第2期研修生)も参加してくれるのです。小さな交わりながらも知れませんが日本のPHDを媒介としてタイ、スリランカとフィリピンの草の根の青年が自分達の村づく

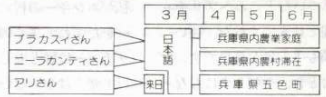
りに連帯する望みを託し得ることを期待したいと思います。もうひとつの韓国の農村をその相手として考えています。日本と同様にここいスピードで経済開発が進められている韓国では農村の過疎化のスピードも速いようです。数ヶ所の農村地域を訪ね感じたことはそんなことでした。しかしその中でも大地にしっかりと根を張って



左から、パニサレスさん、Dr.タワ、マリトさん

土を愛しそこに生きる百姓に出会うことができました。その一人は呉在吉先生です。PHDの願いを聞いて先生は多くを語られませんでした。特に崔先生は同志に呼びかけて韓国にもPHDをと積極的に関心を持って下さいました。今後これらの先生を軸にしながらもうしばらく韓国の農村を訪ね交わりと出会いを深めてから具体的に東南アジアの青年をお預かり戴こうと考えています。こうして生れる交流の中でこそPHDの願う国際理解や連帯の業を形成したいものだと思えながら11月6日午後伊丹に帰着いたのでした。

第5期研修生紹介



日本に着いたとき、本当に寒かった。今は体も慣れてきました。まだ日本の習慣などよくわからないので、間違いをすることもありますが、ごめんなさい。早く日本語を覚えて勉強を頑張りたいと思います。私のための勉強ではなく、村の人々の必要としていることを学ばなければなりません。日本では、机の上の勉強よりも、いろいろな村の中で女性がどんな活動をしているのか、観察したいと思っています。



日本とタイは同じところもありますが、違うところが多いようです。日本は、ビルとか道とかとてもきれいで大きい。また機械もたくさんあります。私の国は、自然がたくさんあります。だから、今は、日本での生活にまだ慣れがあります。けれどもホームステイの家族の人々は優しく、私の国の家族と同じように心に暖かさを感じさせてくれます。私は日本で特に、農業協同組合を学びたいと思っています。私の村の人々は学問がないためにだまされることが多い。また村づくりを行っていく指導的立場の人少ない。私は頑張りたいと思います。

第1回 「タイ」スタディツアー

1986.12.21~1987.1.9

●参加者 9名 ●タイ北部山岳地域

■タイ スタディツアーのあとに

ムンキー村^①に入った日本人が、どのように村の中で定着できるか私の心配だった。しかし文字通り案ずるよりは生むが易し。勿論日本の村から出かけた井上夫妻は例外として、都市の生活に慣れている人々が示した態度は概ね好感のもてるものであった。ただ我々が先入感として持っていた「貧しさ」が、もう一度その内容を問い返されたことはある。人間の常として、それは自分の体験との比較で考えることが多いが、アジアの草の根にある状況に即して捉えることを、我々は学んだのではないかと考えている。

問題はこの旅の終りから始まる「日本人としての生き方」に関係してくるのだ。我々が国と国との関係だけでなく、人と人との関わりの中で今後どのような交流を継続して創ることができ、交流の内容はどんなプログラムを生み出すのか。

実はそのことの中にPHD運動の生活化が、そして運動の拡大の鍵があるのだと思う。

① チェンマイから車で6時間北上したところにあるカレンの人々の住む村。

バチフリ タイ道中抄

大森和夫 (池田市)

かの大阪空港でのタイ航空事件の煽りをくいと旅が倍となった。ペリヤ嬢に、ムシキは寒い、寒いと脅されて、防寒の備えおきおき怠りなく、JALボード・インがクリスマス・イブ、香港でドロップイン気温25度、時差2時間の遅れでバンコク32度とまさに真夏、更に900キロ北上し最初の夢を結ぶチェンマイが20度、どちらを見てもし夏スタイル、ジット我慢の子ホント二間の抜けた話、これぞ百聞は一見(験)に如かず。やっとなの思一夜の夢のエンの頃、突如としておん鶏のときの声「コケコッコ」まさに晴天の霹靂、人口少ないと雖もNo.2の都市でこの声を聞くとは、「十年振りかな?」「鳴き声はどの国でも一緒だが」馬鹿げた事が頭を掠めたが只新鮮な思い。数時間ソロバン・洗濯板以上の、黄砂ももう道の行き難行善行の果てを目指すムシキに到着。その後毎朝コックのご挨拶。村の人達の顔は明るく、特に子供達の日は澄んでいて、電気なし・紙便わすれの中で平和な生活が営まれていることがよく判った。只最後の晩プリチャー^①と2時間程話合ったが、人々の底辺にある悩みを知り、ただ腕を組んだまま。別れ

スタディツアー レポート

の朝、「螢の光」を嗅い、互いに瞬間泣きペソ、胸の詰まりを覚えた。村の人から何時帰ってくるのかと問われ、又バンコクでも言われたが、感慨は暖かい心の交流が第一だということであった。

① 第3期研修生 兵庫県美方町を中心に農業を学んだ現在はムンキーの学校で農業の指導中。

■大森和夫氏のプロフィール

早口の岡山弁でPHD運動のことを話される氏は、わいわいのオフィスに近くはならぬボランティア。田舎静かにワープロ機に向かって熱々と会員データを打ち込んで下さる方。長く国鉄の運転部門につとめ退職前には新幹線にも乗っておられました。フリスチャンの実践の場をPHDに注ぎ込んで下さっています。



プリチャーさんの指導で堆肥を入れキャベツが頼りに育つ畑(中央、プリチャーさん)

じっくり ゆっくりプリチャーさん 井上昌博・敦子 (兵庫県美方町)

6時間の山道をトラックで走る。遠々と続く起伏に富んだ赤土のはこり道。プリチャーの待つムンキー村に着いた時は、お尻の痛さもう限界。ひと息ついたところへプリチャーが、あの笑顔で迎えに来てくれた。強い日差しにせいか、顔も手も足も真黒です。プリチャーが帰国したとき、まだ1才にもなっていない私の娘は、2.3分もしないうちにあのやさしいお兄ちゃんを思い出し、抱かれてはしゃいでいます。夕暮れの中プリチャーの家へ歩きながら、私はのれんを見て苦笑いするプリチャー。これは、荒々しく取りがけ捨てた靴で、それをゴミ捨て場の山の中からプリチャーが拾い、国内での研修の間、ずっとはき続け、帰国するときに私にのみずりもたらした物だったからです。プリチャーが勤務している学校で、彼は生徒と一緒、畑のすみに水牛やブタの糞、草、小枝、落葉を集め、土を混ぜ合わせて堆肥を作っていました。日本から帰国してすぐ作っ

たものらしく、とてもいい堆肥になっています。子どもたちは、自分の畑に種をまくとき、竹かゴザやバケツに何杯かずつこの堆肥を選び木灰をかけて作物を植えていたようです。そのせいかやはりいい野菜が収穫、成果はあるようでした。また、日本から持ち帰った種や政府の農場からもらった種を、自分は使わず、授業で使ったり希望する熱心な村人に分けているようです。5人の熱心な人が集まり、農業のいろいろな試みをしています。どの人も、米以外のものもある程度まで作れるようになったのは、ここ2-3年のことです。政府のすすめるコーヒーの木や、プリチャーから習った野菜作りも、ラテライトというやせた赤土、水不足、虫害や病気も関係して十分に成果を

あげていないのが現実でした。プリチャーの希望として、遠い町から種を買うのではなく、自家採種できる作物で、虫、病気、雨、乾期に強い作物が欲しいとのことでした。この点は、遠く日本にいながらにして協力できるのではないかと考えています。私がムンキーの村にいた半月間に、プリチャーをたずねて多くの人がやって来ました。プリチャーは誰ともじっくり話をします。「これ以上悪くはならない。村の人いろいろな試みを重ねるたびに技術を身につけ、近いうちにたくさん作物が収穫、少くとも村の中で自給できるようにする」ムンキー村での農業を軌道にのせ、生まれ故郷のメーサリエン^①に帰り、両親とともに自分の思う農業をしたいとのことでした。



① ビルマ国境に近い町。

■井上昌博・敦子氏のプロフィール 夫とも大学卒業後農村にリターンされ、あえて困難な営農に挑まれています。プリチャーと文字通り兄弟のつづきあいをされています。土に生きることで都市と農村の橋を渡るゆみに顔が下がる思いがする方です。

それぞれ帰国研修生が、PHDの考え方を理解し、外部からのモノ・カネに頼らない、村おこしを行っており、成果としてはまだまだ十分ではないものの、とても心強く感じました。あせらず、地域の人々とともにがんばって下さい。

第5回 「ネパール」スタディツアー

1986.12.21~1987.1.2

●参加者 10名

Aコース:カトマンズ・マザーズクラブ~ポカラ

Bコース:ポカラ・ラダ宅~チャバコート

Cコース:ポカラ・ラダ宅~シャンジャ・ニールン宅

PHD協会が行うネパール・スタディツアーも5回目となりました。ネパールからむかえた研修生は8名。この研修生達のフォローアップを兼ね10人が参加して行われました。参加者レポートによる各研修生の近況、参加者がネパールの人々から学んだことをお伝えします。

ラダ・バンストローラさん

(2期生/編物・洋裁)

ラダさんのお世話になりはじめて3日目、ポカラから徒歩と舟でたどりつたチャバコート村で、洋裁の指導が始まります。遠い人は3時間かけて歩いてやってきます。集まった女性達は粗末でしかも汚れたサリーをまとっていましたが、皆一様に瞳は輝き、明るい表情です。ミシンを庭先に持ち出し、むしろを敷いて教室のできあがりです。今日はスクートの勉強。ラダさんがそれぞれに布地を分けます。スクートは布を輪に縫って、ベルトをつけるだけの単純なものでしたから、私も一緒に縫ってやったりです。お年寄は嫁たちが洋裁を習うのをそばで座ってみえています。子供たちは囲りをとりかみワイワイガヤガヤ。そのうちにミシンの調子が悪いとか、裾の始末はどうするかと身振り手振りの質問です。何しろ針一針を大きな目で縫い合せるのが精一杯という村の女性ですから、指導が大変です。だんだん形になっていくのが嬉しそうな女性達、それを見守るラダさん。ここでは村の女性が自分の子供に着せる服と家族の衣服の修繕が目的です。自分達の力でという村の人たちの姿勢とラダさんのあわてない取組みに感心しました。高橋マサ(兵庫県加東郡)

ラダさんは上記チャバコートでのプログラムの他、ポカラで編物グループをつくり、その収益で、地域の生活改善、教育向上をすすめています。

それぞれ帰国研修生が、PHDの考え方を理解し、外部からのモノ・カネに頼らない、村おこしを行っており、成果としてはまだまだ十分ではないものの、とても心強く感じました。あせらず、地域の人々とともにがんばって下さい。

帰国研修生の活動

ブレンドラ・アマティアさん

(1期生/農業・養鶏)

食品会社に勤務しながら、自宅で養鶏を行う。昨年の渡辺先生による現地指導を生かし、卵による収益があがっている。もう少し経験を積上げた後、カトマンズ郊外の村への指導を計画。3-4月に結婚の予定。

ニールン・ガウチャンさん

(3期生/指圧・大豆加工)

お母さんの死去によって、これまでは忙しかったようである。指圧の指導と大豆加工による栄養改善の計画を準備中であるが、村の人達にとっては栄養の理屈より、おしさが先に達して工夫が必要とのこと。

ビシュヌ・アティカリさん

(2期生/養鶏)

今回は仕事の都合で(家族計画協会職員)、会うことができなかったが、村に入って活動中とのこと。

サンバ・カヤスタさん

(2期生/指圧・公衆衛生)

8名のうち最も奥の村に入っているため、今回は訪問できず。ツアー終了後、日本に届いた手紙では、公衆衛生、栄養の指導を村に行いながら、自らの生活基盤の強化にがんばっているとのこと。

ショーバナ・シュレスタさん

(3期生/織物・洋裁)

スリジャナ・サヒさん

(2期生/編物・手工芸)

サヒさん、ショーバナさんの活動するマザーズクラブは、カトマンズのドカトールという地区で活動している。8名のリーダーがいるが、そのチームワークの難しさを感じる。この2年リーダーの交代もあった。作業場も狭い。私は2年前にもここにおりましたが、その時もらった編物製品の在庫がない。これはショーバナさんの帰国後、新しいデザインにしたところ、注文が殺到しているとのこと。しかし、製図して指導するのはショーバナさん一人なので、テンコ舞い。早く彼女に続く指導者が育つようにと涙ぐましい努力を続けている。サヒさんは勤め関係で休日しか奉仕できない。セーターに縫いていえばネパールの人の好みと外国人との好みが違うので、その考慮が必要である。今は編物のプロジェクトが忙いようだが他にも現金収入の策をとのリクエストに対し日本から、かぼちゃチップ、豆入りマヨネーズなどの見本を持つ。実習も1日してみたが彼女達のプログラムのヒントになればと思う。

① 山下富士(徳川女子短大講師・兵庫県芦屋市)



サヒさん、ショーバナさんはいずれもマザーズクラブで裁縫・織物による製品の収入によって地域の婦人の生活改善にとりくんでいます。

マザーズクラブの前でサヒさん、ショーバナさん(ネパール・カトマンズ)

バラト・ピスタさん

(1期生/農業・養鶏)

日本での研修をもとにピスタさんがとりこんでいた養鶏事業ですが、現在はいまよくいってないとのことでした。現地でも日本から派遣された青年海外協力隊の隊員と話すことができたのですが、殆どピスタさんの活動を知らず、ひとつの団体のサポートだけでなく、同じ地域にある他の活動との個人間のつながりから情報交換のやりとりがあれば、もう少し効果的なとりくみが可能になるのではないかと感じました。

ピスタさんは現地の家族計画協会の職員として、パフニバチ地域で日本での農業研修の体験とその活動に生かしています。

井高ひさ子(兵庫県・尼崎市)

●岩下八史(運送業・牧方市)

私はネパールの貧しい人のために何かを思っていたが、とんでもない思い上がりで、ネパールの人に教えられることが多い旅でした。一人の子供にポケットにあったチョコレートを分けてあげたとき、一人占めせず小さなカケラをさらに小さく割って分けあっていたことがとても印象的でした。

●三好理恵(小4・香川県観音寺市)

私は冬休みの前に学校を休んでネパールに来たので、ネパールでできた友達に日本の遊びをしようかいました。こちらではズボンをはいていない子、服がバリバリの子などいました。道端の足が悪い人にお金をくださいといわれました。私はあげたかったけれど、もっていませんでした。大人の人たちはそんな人たちのことを知らん顔で、ぶんぐりたいほどでした。

●横田耕司(大学生・豊中市)

村でお世話になった青年に帰るまきわ荷物の一部をプレゼントしたのですが、他の人たちに「気安くモノをあげたらダメじゃないか」と言われて大変ショックでした。感謝の気持ちも裏目になってしまったようです。生活水準の違うところで「モノ」をわたす難しさから協力の方法について考えてしまいました。

●嶋津ノ子(元講師・兵庫県豊野市)

昨年2月に主人と死別した時、大勢の方々に心から親切にしてくださいました。そしてこれからを人生のしめくりとして大事にしなければと思う様になり、ボランティア活動のできる外国での体験を思いこのツアーに参加しました。私がネパールの方にあれこれより、私が受けたネパールの方からの思いやりが心に残り、心の交流こそほんとうのボランティアではないかと感じました。

東西日本 STUDY TOUR

PHD研修生は、日本での研修期間中、各々の個別研修の他に、研修旅行に出かけます。研修旅行の目的を、今年度は、

1. PHD運動を支えて下さっている方々とお会いし、御礼と報告を行い、あわせてPHD運動の輪を広げる。
2. 様々な集会を通して、日本での学び、自分達の地域の様子を日本語で語り、自国での普及活動、グループ作り、リーダーのあり方などを実践として学ぶ訓練を行う。
3. 広島、長崎での平和学習の他、様々な社会問題に触れ、その問題と取組んでいる人々の考え、活動から学ぶ。

の3つに置き、東日本研修旅行（11月下旬～12月上旬）を、西日本研修旅行（1月中旬～2月上旬）を、秋から冬にかけて実施しました。各地では、集会、見学、交流など暖かい受け入れをして頂き、誠にありがとうございました。その貴重な体験に基づく研修生の感想を紹介いたします。

出会った人たちのこと

ユリ
正直なところ、私の村の人々（インドネシア、西スマトラ）は日本人のことをあまり好きではありません。戦争のときのことや、日本の大きな船が魚をたくさんとっていくことなどがあるからです。けれども私はこの旅で



研修者の方からお話を伺う（長崎市平和会館）

日本人の暖かい心を知ることができました。とても嬉しいことです。PHDがどういうふうになり立っているのか、ということもわかりました。

ウィラット

日本人の国を良くしていきたい、と願って行動している人々がいることは素晴らしいと思う。

ユリ

アジアの国々に対して見下げた感じを持っている人々もいたことは残念でした。

ユリ

私たちは何か行動する時、必ず、心＝宗教に問いかける。日本人は宗教の心を大切にしていなと思った。自分のことだけ考えて、ものごとをすすめるのは良くない。

リーダーシップについて

ウィラット

様々な会合では、参加者に応じて話の内容や方法を変えた。私は人前で話をするということはとても苦手であったが、日本で数多く経験する中で自信が持った。村の人々の話をよく聞き、またこちらも話を一緒にしていくこと、これは村に帰っても大切なことだと思ふ。

ウィラット

日本のいろいろなところで人に会って、どんなリーダーに人々がついていこうかを見ることになりました。

広島、長崎、水俣、筑豊などで感じたこと

ウィラット

平和を作ろう、と言うことは簡単だ。小さいグループだけで取り組むのではなく、大きく広がって行って、みんなが戦争はいらないと本当に思った時、いい世界になると思う。

ウィラット

私の国では徴兵制があり、みんな好んで兵役を受ける。また世界のあちこちで今も戦争がある。私の村へ戻って平和の大切さを話しても聞いてくれる人は少ないと思う。誰もが本当は、平和を望んでいるのに…。

ベリア

日本に原爆が落とされたのは、日本が東南アジア諸国に悪いことをしていたから、それをやめさせるためですか？

ジャンタ

公害でからだがかげめになることと、ものがたくさん手に入るようになることが、昔からの生活の良いところをこわしてしまふこともあると思った。

ベリア

水俣でのできごとは全然自分たちとは関係のないことと思っている人々が多い。無意識のうちにまた同じ過ちをくり返しているのではないか。

ベリア

私の国の海も汚れつつある。日本でおきた問題をくりかえさないようにしたい。

ウィラット

「日本の経済の発展のために一生懸命働いた炭坑の人たちのことを、今の多くの日本人はあまり知らないと思いました。私は村に帰った時、困っている人たちのことをいつも思うようにしたいです。」



「アジアを考える会」との交流（北九州）

研修を終えて

第4・5期研修生予定

	3月	4月	5月	6月
ウィラットさん	離日	研修	研修	帰国
ベリアさん	離日	研修	研修	帰国
ユリさん	兵庫県五色町柳宅	研修	研修	帰国
ジャンタさん	兵庫県八千代町・青位宅 他	研修	研修	帰国

日本での研修を終え、ウィラットさんとベリアさんは、3月中旬から約10日間、フィリピンで研修を行いタイの山村へ帰ります。ユリさんは、4月上旬の帰国です。彼らが学んだこと、それは日本の農業、漁業、保健の知識と技術に加え、それぞれの生活の中で、日本の人々の生きている姿勢、周りに対する配慮など、地域のリーダーとしてどんな生き方が良いのか考えることができました。PHDの研修は生活現場の中で行われます。日本の人々との生活の中から、村の人々に伝えることのできるヒントをつかんでもらう学びなのです。ホストファミリー、研修先の方々をはじめ、多くの皆さんのおかげで無事に研修が行われましたことを感謝いたします。ジャンタさんは6月中旬まで、稲作を中心とする実習を続けます。5期生は、現在、日本語の特訓を受けています。応援して下さい。

PHD NEWS

会費・ご寄附寄託状況

1986年11月	¥ 1,985,064.-	116件
12月	¥ 8,493,263.-	721件
1987年1月	¥ 2,774,241.-	246件
	¥ 13,252,568.-	1083件

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。特に12月は年末募金にご協力いただき深く感謝申し上げます。

新職員ご紹介

これまで管発事業を中心にがんばってくれた協会の華、裴侑香さんが退職し、代って4月より木村清美さんが新しいスタッフに加わります。よろしくお祈りします。

4月1日より、PHD協会の住所が変わります。くわしくは8ページを。

パソコンオペレーターボランティア大募集

昨年5月より会員データを整理し、正確かつ迅速な事務処理のため、コンピューターにデータを入力中ですが過去のデータが膨大なため人手が足りません。あなたのお時間をぜひ！コンピューターに触れたことのない方でも大丈夫。すべてご指導いたします。協会、木村まで。



編集/後記/

今号は特集記事満載の豪華メニューとなりました。アジアの体温を感じさせる記事が多かったのではと自負していますが、いかがでしたか？皆様のご意見、ご感想等ぜひ協会までお寄せ下さい。

第4期生研修生の帰国に際し、とても寂しく思うのですが、ある種の「さわやかさ」も感じています。この一年間で彼らの成長ぶり、彼らとの交流をふりかえり、また来日したばかりの5期生に対する彼らのやさしい先輩ぶりを見ると、そこに「始まり」を感じるからです。帰国後、各々の地域でのよきリーダーになってくれるであろうという「予感」を感じるからです。彼らからこちらが

学んだことも多く、本当に貴重ないい出会いだったと感謝しています。そして、だからこそ「さわやかな」別れ。別れはいつもこうありたいと思います。みんな元気です！ Y.H

レター22号 編集メンバー
赤松恵美子 川原辺裕子
坪 光子 三 美代子
加藤喜美子 豊島 理子（五十音順）

新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。